木村秀弘

故木村秀弘君のご霊前に謹んで弔辞を捧げます。君はもともと頑健であり、かつ常に健康に留意されていたので、今こうして君とお別れしようとは、夢想だにしなかったことであります。君が病を得て入院されたのも、つい最近のことであり、われわれ一同は、均しく君の早期回復をひたすら祈っていたのであります。しかし先日、私が君を病床に見舞った時は、すでに君の病状は急速に進み、君は病魔との死闘に最後の力を振り絞っておりました。そしてその翌日、私はついに君の訃報に接したのであります。事態の進行はあまりにも早く、その結末はあまりにも残酷でありました。今こうして君の霊前に弔辞を捧げるに当たって、改めてやり場のない憤りと哀惜の念を抑えるすべを知りません。

顧みれば、君は昭和十二年春大蔵省に職を奉じ、大臣官房会計課長、主税局税関部長などを歴任し、昭和四十年二月に国税庁長官を最後に退官されるまで、終始財政、金融の各分野にわたって幅広く活躍されました。

とりわけ、君が残された税関行政への業績は特に大なるものがありました。戦後民間貿易が再開された時期に、君は前後十年の長きに亘って税関行政に打ち込み、再開間もない税関行政を再建すべく、不屈の意志をもって卓越した実行力を発揮されたのであります。とくに、保税制度の確立と密輸取締りの徹底を通じて、君は戦後貿易に新しい秩序を打ち立てたのであります。今日、後輩諸君から、「戦後税関育ての親」として追慕され、評価されている所以であります。

また君は内国税執行行政の経験を全くもたないにもかかわらず、その高潔な人格と高い識見をかわれて、国税庁長官に迎えられ、ここにも類い稀なる業績を残されたのであります。とくに、君は「五の日の税務相談」の制度を創設して、善良な納税者の声を税務行政に積極的に反映する一方、一部非協力的な態度をとるものに対しては、毅然たる態度で臨まれました。また、第一線職員の労苦に対しては、福利厚生面の改善に並々ならぬ努力を払うなどして、名長官の名をほしいままにされたのであります。

官界を退かれた後は永野重雄氏に請われて、東海製鉄、富士製鉄、新日本製鉄の常務取締役、常任監査役を歴任したが、昭和四十八年十月に日本専売公社総裁として再び公職に復帰することになりました。時あたかも、日本経済は石油危機に見舞われ、専売公社の経営も大きな影響をうけつつあったのであります。君は財政収入の確保と、消費者への奉仕という公社の使命達成のため、英断をもって、たばこの定価改訂という困難な問題に立ち向かわれたのであります。君が病

を秘めて最後の最後まで尽瘁されたこの問題は、遺憾ながら今国会では解決に至りませんでした。しかし私どもは、この君の悲願は、何としてもこれを達成して、君の期待に応える覚悟であることをここにお誓いする次第であります。

思えば、君は私より一期おくれて大蔵省に入省しました。爾来、君と公私両面にわたって兄弟にも比すべき醇厚な交りを続けることができたことは、私の生涯にとって大きい喜びであり、誇りでもありました。君は正義感に強く、身を持するにきわめて清廉でありました。また人に対しては、かたくななまでに信義に厚く、人情味あふれる人でありました。この人柄こそは、君を知る全ての人に深い尊敬と親愛の情を抱かせずにはおきませんでした。

今、静かに目を閉じて、ありし日の君を思い浮かべるとき、四十年になんなんとする交友の節々が走馬灯のようにかけめぐり、懐旧と追慕の情に耐えません。

今や、幽明境を異にし、再び君の温容に接することができません。しかし、成長された二人のお嬢様はともにわが大蔵省の後輩に嫁がれており、君の衣鉢をついでおられます。

また、これまで君が大蔵省と日本専売公社に注いできた愛情と期待は、君が育てた多くの後輩を通じて脈々と受け継がれることでしょう。

ここに生前の業績をたたえ、遺徳を追慕しつつ、お別れの言葉といたします。

（昭、五〇・七・一二　弔辞）